

(1)

# 信心のモデル、自己称揚のモデル

——ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの祈祷者像と初期フランドル絵画——

今 井 澄 子

## 1. 初期フランドル絵画の祈祷者像の革新性

祈祷者像 (prayer portrait) は、聖母子や磔刑などのキリスト教図像に見られる信徒の姿で、聖なる人物に向かって跪き、祈る姿で表わされる (図 1)。個人の相貌を記録し後世に伝えるという点では独立した肖像画 (portrait) の担う役割と共通するが、まずは聖なる対象への信心を示すものであり、崇敬対象とは、大きさ・高さ・聖人の仲介・跪拝する空間・観面・光輪や天蓋 (cloth of honor) の有無などによって区別される<sup>(1)</sup>。祈祷者像は初期キリスト教時代から表わされてきたが、15 世紀の初期フランドル (“Primitifs flamands”) 絵画に描かれた祈祷者像は、祈祷対象と同じ大きさ・空間に表わされるという点で革新的である。

初期フランドル絵画の祈祷者像のなかで形式上もっとも革新性が強いのは、画家ヤン・ファン・エイク (1395 頃～1441 年) が 1430 年代なかばに描いた《ロランの聖母子》(図 2) である<sup>(2)</sup>。この作品において跪き祈るブルゴーニュ公国の宰相ニコラ・ロラン (1376 頃～1462 年) は、祈祷対象である聖母子と空間を同一にし、仲介聖人もなく祈祷対象と画面を二分し、ほぼ同じ高さで向かいあっている。同時期には、ロベール・カンパン (フレマールの画家) による《太陽の聖母子》(エクサン・プロヴァンス、グラネ美術館) やロヒール・ファン・デル・ウェイデン (1399/1400～1464 年) による《聖母子を描く聖ルカ》(ボストン美術館) などにおいても、祈祷者の強調や聖人との空間の共有という点で新しい表現が試みられた。さらに、1440 年代以降にも、ロヒールの《ブラーデリンの祭壇画》(図 3) やロヒール派《磔刑》(ロンドン、ナショナル・ギャラリー) のように、聖なる場面に参入する祈祷者の姿が多く描かれた<sup>(3)</sup>。また、パネルによって空間が分けられるものの、聖母子と仲介聖人のない祈祷者が相対する二連画の制作も増加した (図 4)<sup>(4)</sup>。

聖なる人物と空間を共有する祈祷者の描写が増加した背景には、中世後期～末期に流行した個人祈祷を挙げることができる<sup>(5)</sup>。個人祈祷では、信徒が聖なる存在と直接的に向かい合うことが勧められるため、すでに 14 世紀末の時祷書の写本挿絵にも、仲介聖人もなく聖なる対象と対峙する祈祷者の描写が見られる (図 5)。とはいえ、この挿絵においては、彫像として表わされるキリストに対して祈祷者が低い位置で跪拝しているため、両者の階層の差は明らかである。他方で《ロランの聖母子》の祈祷者は、ダマスク織の豪華な衣装をまとい、単独で聖母子とほぼ対

(2)

等に向かい合っている。この表現は、信心を示すという祈祷者像本来の役割から考えると大胆にすぎるくらいがある。そこにはむしろ、注文主ロランが俗界における自身の富やステイタスを誇る自己称揚的（self-admiring）な側面が多分に含まれているように思われる。

祈祷者像の自己称揚的な側面については、当時、ルネサンス的な新しい精神が出現し、肖像画の注文制作が増加していたという事情からも理解できるだろう。しかし、聖と俗の要素が混交する祈祷者像に対して、当時の注文主たちがどのような姿を理想的とみなしていたのかという問題については、いまだ十分に検討されていない。

そこで本稿では、初期フランドルの画家や注文主の「モデル（模範）」となるような先導的な役割を担った者として、当時この地域を支配したブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボン（「善良公」、在位 1419～1467 年、図 6）に注目したい。フィリップは 1419 年にブルゴーニュ公の位を継ぐと北方のフランドル（ネーデルラント）へと領地を拡大し、同地に滞在する時間を増やし、統制につとめた<sup>(6)</sup>。また、彼は初期フランドルの画家たちの有力なパトロンとなったばかりでなく、祝祭などのさまざまな場面において、自身を称揚するイメージを示した<sup>(7)</sup>。フィリップ・ル・ボンの自己称揚の意識は祈祷者像にも及んでいるが、フランドル絵画の中心的な媒体である板絵の作例がほとんど現存しないため、比較対象としては注目されてこなかった。だが、媒体のもつ役割の差異を考慮しつつフィリップの祈祷者像を分析するならば、ブルゴーニュ公国治下のフランドルで共有された望ましい祈祷者像のイメージを浮かび上がらせることができるように思われる。

以下ではまず、当時の記録と証言からフィリップ・ル・ボンの信心と自己称揚への意識を検討したうえで、美術作品に表わされたフィリップの肖像と祈祷者像を分析する。そして、初期フランドル絵画との比較を通して、フィリップの祈祷者像が「モデル」として果たした役割を明らかにしたい。

## 2. ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンの信心と自己称揚

### (1) フィリップ・ル・ボンの信心

ブルゴーニュ公国の年代記作者ジョルジュ・シャトランの伝えるところによれば、フィリップ・ル・ボンは「神に仕え神を畏敬しており、聖母マリアへの信心も篤く、内密に多大な施しをしていた」という<sup>(8)</sup>。公国の各地にあったブルゴーニュ公の居住地には専用の礼拝堂が備えられており、それぞれ、一人もしくは数名の礼拝堂付司祭を任命することができた<sup>(9)</sup>。フィリップは毎日ミサに参加したが、教皇の特許により、通常禁止されていた午後にも執り行わせることができたという<sup>(10)</sup>。さらに、礼拝堂でミサを聞くことのできない戦時中には、従軍司祭を任命した。しばしばミサの時間を守らず、キリスト教徒として度を越しているなどと批判されることもあるものの<sup>(11)</sup>、信仰への熱意を伝えるエピソードは多い。

たとえば、シャトランと同様に公国の年代記作者をつとめたオリヴィエ・ド・ラ・マルシュ

は、フィリップの信心が戦場でも示されたことを伝えている。それは、1443年のルクセンブルク城攻略の戦いの最中のことであったが、フィリップは従軍司祭が挙げるミサを聞いていた。そして、出発を待ちいらしめる従者たちには以下のように諭し、祈りを最後まで続けさせたという。「神がわたしに、勝利を与えたもうたのだ。神がわたしのために、勝利を取りおいてくださるのだ。神はわたしの祈りにこたえ、全騎士隊をもってするのと同じ働きをしてくださるのだ…神のお助けを得て、わたしの着くまで十分に持ちこたえてくれよう」<sup>(12)</sup>。ここにかがえるフィリップの信仰心は、戦中という極限状態であるからこそいっそう真実味を帯びているように思われる。

## (2) フィリップ・ル・ボンの自己称揚

他方で、ブルゴーニュ公という支配者の立場からは、フィリップ・ル・ボンは、キリスト教会との関係に配慮する必要があった。中世の支配者たちの多くは、教皇庁との良好な関係を維持することで領土内外の政治的な立場を有利にしようとしたが、フィリップはとくにその意識が強かったようである。彼は、教会組織が混乱し、フランスをはじめとする多くの国々が反教皇側に回ったバーゼル公会議（1431～1437年）の時ですら、教皇エウゲニウス四世（在位 1431～1447年）を積極的に擁護した<sup>(13)</sup>。また、公が1454年に催した有名な祝宴の「雉の饗宴」においても、対トルコ十字軍の遠征計画を表明することによって教会への忠誠を示した。それゆえフィリップは、1453～1458年の教皇ニコラウス5世やカリクタス3世の勅書において「キリスト教会の信仰の勇猛な戦士にして恐れ知らずの闘士(christiane fidei fortissimus athleta et intrepidus pugil)」と称された<sup>(14)</sup>。

領土内においては、フィリップは各地の教会・修道院への寄付、ミサ基金の設立、大ステンドグラスや蠟燭などの寄贈を頻繁に行った。また、信心会・聖歌隊員養成所などの教会組織も積極的に設立し、名実ともにブルゴーニュ公の存在を印象づけ、浸透させていく<sup>(15)</sup>。さらに、フィリップが1441年に作成した遺言にも、修道院などの遺贈先と遺贈額にくわえ、公自身と先祖のために挙げるミサの詳細が指示されている<sup>(16)</sup>。そこには、信心深さばかりでなく、支配者としての立場をより強固なものにしようとするフィリップの意図を認めらることができる<sup>(17)</sup>。

このように、ブルゴーニュ公フィリップの宗教的行為には、敬虔さとは別に、教会関係者や公国民の視線を意識した政治上の配慮が含まれていたことがうかがえる。たしかに、ブルゴーニュ公の行動は、ミサに参加し祈るような一見私的な行為でも常に人目にさらされ、その言動は年代記作者によって観察・記述されるものであった。同様に、写本挿絵には、家臣に囲まれ祈るフィリップの姿も残されている（図10）。そこに描写されるフィリップに作者による称揚が含まれていたとしても<sup>(18)</sup>、フィリップ自身もまた、これらの記述やイメージが人々に与える印象に無関心であったはずはないだろう。

フィリップを称揚するために用いる美術作品のイメージには、まずは肖像や、古代の支配者などに自身をなぞらえる擬装肖像が挙げられる。たとえばフィリップは、多くの訪問客の訪れる邸

(4)

宅の広間にアレクサンダー大王を表わしたタペストリーを展示し、支配者としての自身の姿を強調した<sup>(19)</sup>。これらは世俗主題のイメージだが、宗教的な場面においては、支配者としてのフィリップを称揚しつつ、キリスト教徒の「モデル」となるような敬虔さを含む祈祷者像が求められたのではないだろうか。そこで以下では、まずフィリップの肖像表現に見られる自己称揚の特徴を検討したうえで、祈祷者像の描写を確認したい。

### 3. フィリップ・ル・ボンの肖像における自己称揚

シャトランがフィリップ・ル・ボンを「見かけからすると、皇帝とも思われるほどだった。自然の恵みの上に王冠をいただかれるにも値するほどだった<sup>(20)</sup>」と称えたように、同時代人にとつてのフィリップは、支配者にふさわしい風格を備えていたようである。1438年にフィリップに謁見したスペイン貴族も「大公は、そのご人品いとも高貴で、精力にみち、この上なくお優しく、お姿は良く、背丈があり、優雅で、澁刺として、騎士の面目躍如」と言葉を尽くして賞賛している<sup>(21)</sup>。

シャトランはまた、フィリップの容姿を以下のように詳述している。「背は高く…、肉付きがよいというよりは骨ばっており、肌の血色はよい。…鼻は長いが鷲鼻ではなく、額は高く広いがはげてはいない。髪の毛は金と黒の間くらいである…口はちょうどよい大きさで、口唇はよく色づいている。公の目つきはよく変わり、ときにひどく疑り深くなるが、ふだんは好意的である…<sup>(22)</sup>。」今日に伝わるフィリップの肖像画には、シャトランによって描写された特徴が十分に見いだされる（図6）。

さて、初代ブルゴーニュ公フィリップ・ル・アルディ（在位 1363～1404 年）がディジョンのシャンモル修道院の礼拝堂扉口に等身大の肖像彫刻を飾り自身の神の代理人としての立場を主張したように<sup>(23)</sup>、歴代のブルゴーニュ公は肖像画や肖像彫刻を多数制作させ、流布させた。フィリップ・ル・ボンは、とくに 1440 年代以降に肖像注文を増やし、板絵、壁画、写本挿絵、彫刻、ステンドグラスなど多岐にわたる媒体を利用して、先代をしのぐ量の肖像を制作させた<sup>(24)</sup>。その数は、記録やコピーも含めると 100 以上にのぼると推定される。そしてこれらの肖像は、公国内の聖堂の入り口正面や、聖堂内部、ルーヴェン、ブルッヘ、イープルなどの都市の市庁舎などに設置され、多くの人々の目に触れたと考えられる。

このように多数流布していたフィリップ・ル・ボンの肖像には、フィリップを称揚するための典型表現が認められる。それは、黒色の衣服に、フィリップが 1430 年に設立した金羊毛騎士団の首飾りを身につける姿である。フィリップのまとう黒い衣服の素材はたんなる黒ではなく、サテンや模様の入ったビロード素材、あるいはダマスク織や金糸の刺繍や飾りが施された生地が用いられ、彼の富やステイタスを強調している。黒色は中世末期から流行色となり、フィリップはその人気を牽引したひとりであった<sup>(25)</sup>。なお、紅色のマントをまとっている場合もあるが、それは金羊毛騎士団の正装であり、作例は多くない（たとえば、アエギディウス・ロマヌス『王制

論』ラテン語版の仏語訳、1452年、ブリュッセル、王立図書館、ms.9043, fol.2.)。さらに、フィリップの権威は、玉座、王笏、紋章、あるいはモットー「他の者を持たぬ (Autre n'auray)」を表わすことによって示された。

フィリップのステイタスがとりわけ強調されるのは、写本の冒頭頁で筆者が完成本を注文者に献ずる場面を表わす「献呈画」においてである<sup>(26)</sup>。フィリップは通常、金羊毛の首飾りをつけ王笏を持ち玉座に座り（あるいは立ち）、臣下に囲まれながら写本を受け取る姿で表わされる（図7）。さらに、玉座を囲む天蓋や床、あるいは欄外装飾に公の紋章やモットーが繰り返され描かれることによって、フィリップがよき政治家であり文芸の保護者であることが誇示される。

このように、フィリップ・ル・ボンの肖像は、その容貌の再現に留まらず、玉座、王笏、紋章、モットー、金羊毛騎士団の首飾りなどのモチーフをくわえることで、公のステイタスを称揚していた。

#### 4. フィリップ・ル・ボンの祈祷者像における自己称揚と信心

##### (1) 記録にみるフィリップ・ル・ボンの祈祷者像

それでは、フィリップ・ル・ボンの祈祷者像にはどのような特徴が認められるだろうか。史料からは、肖像と同様に、板絵、壁画、写本挿絵、ステンドグラス、彫刻などのあらゆる媒体に祈祷者フィリップが表わされていたことがうかがえる。以下では、J. C. フィリップの調査をもとに、フィリップの祈祷者像を年代別に概観したい<sup>(27)</sup>。

まず、最初期の作例としては、アラス近郊のチュールロワのドミニコ会小修道院において1430年以前に描かれたと推定される壁画が挙げられる。この壁画は1639年の火災によって焼失してしまったが、残された断片的な模写から、その構図は、中央に描かれた聖三位一体の左右に、祈祷台に跪き祈るフィリップ夫妻が配されたものであったと推定されている<sup>(28)</sup>。

続いて1430年代～1440年代初頭になると作例が増加し、とくにステンドグラスには1430年代と1440年代初頭の注文記録が約12点残される。これらの作品に関する史料からは、聖母子などの祈祷対象と、祈るフィリップ夫妻、そしてブルゴーニュ公国とフィリップ夫妻の守護聖人であった聖アンドレや聖エリザベスなどが頻繁に表わされていたことが読みとれる。その構図の詳細は明らかではないが、チュールロワの壁画の構図のような一定の型になっていたとも考えられている<sup>(29)</sup>。

そして、1440年代以降の作例には、ニコラ・ロランの設立したボヌの施療院 (Hôtel-Dieu) に贈られた二連画が挙げられる。この二連画には、一方に聖母とブルゴーニュ公国の守護聖人ベルナルドゥス、他方に祈るフィリップ・ル・ボンが表わされていた<sup>(30)</sup>。他にも数点、祈祷者フィリップの描写を含むと推測される作品はあるが、その真偽のほどや図像内容は定かではない。とはいえ、これらの記録からは、フィリップが肖像と同様に多くの祈祷者像を制作させていたことがうかがえる。

(6)

## (2) 現存するフィリップ・ル・ボンの祈祷者像

つぎに、現存するフィリップ・ル・ボンの祈祷者像を検討したい。表に挙げた 26 点の作例は、一部の例外（表②～表⑥）を除き、フィリップ自身が注文した作品である<sup>(31)</sup>。これらの祈祷者像には、板絵・壁画・ステンドグラスなども含まれるものの、大半が写本挿絵である。フィリップは、当時のヨーロッパの王侯貴族の中でも稀にみる蔵書家として知られ、積極的に写本を注文・蒐集し、最終的に 1000 冊を超える書物を所蔵した<sup>(32)</sup>。写本装飾に対する意識も高く、公国からはウィレム・ヴレラン、ジャン・ル・タヴェルニエなどの優れた挿絵家も輩出された。表に挙げた写本挿絵の制作年に 1440 年代と 1450 年代が多いのは、1440 年頃と 1451 年にフィリップが大量に写本挿絵家を雇ったためである<sup>(33)</sup>。

写本挿絵は、彫刻や壁画などと比してサイズが小さいことが多く、公共の場で一度に多くの人々が観賞するようなものではなかった。しかし、前述した献呈場面（図 7）でフィリップの権威が強調されていたように、公の写本は、第三者が目にすることを前提としていたと考えられる。それは、王侯貴族の写本は、廷臣を従えながらミサの最中に開いたり、後継者に相続させたり、あるいはヨーロッパの他の君主たちに贈呈するものだったからである。このような写本挿絵の特質を踏まえつつ、以下ではフィリップの注文した祈祷者像について、その構図や描写上の特徴を中心に検討したい（表①～表④、図 8～図 19）。

フィリップ・ル・ボンの祈祷者像は、聖務日課書や時祷書など、おもに信仰に関わる書物に描かれる。祈祷対象は、聖母子やグレゴリウスのミサ中にあらわれた磔刑のキリストなど、記述内容によりさまざまである。作品によっては顔立ちがわずかに異なることもあるが、ほぼ全作例に共通する表現が見られるため、同定は容易である。

共通する表現とは、第一に、肖像作品と同様に、黒い衣服に金羊毛騎士団の首飾りをつけている点である。肖像においては帽子を着用していたが、祈祷者像では脱帽している。第二に、祈祷台の上に書物を広げている点である。祈祷台は紋章で飾られることもある。そして第三に、フィリップが仲介聖人を持たない点にも特徴がある。これらの定型表現は、脱帽し、祈祷台の前に跪く姿からもうかがえるように、まずは信心や祈りを導くものであっただろう。表①～表④は同じ書（『フィリップ・ル・ボンの時祷書』）の挿絵であるが、興味深いことに、祈祷者フィリップを描いた写本の上に二連の板絵を付けている（図 8）。本写本と板絵は、一体となって祈祷書とディヴォーション・イメージの役割を担ったばかりでなく、ときには祭壇画の役割も担っていたとさえ推定されている<sup>(34)</sup>。

くわえて、祈祷者フィリップの姿には、金羊毛などのモチーフや表現の工夫によってそのステータスを示すような自己称揚の表現も認められる。とくにその傾向が強い作品は二点ある。

一点目は、『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』において聖アンドレに跪拝するフィリップである（表⑧・図 11）<sup>(35)</sup>。この聖務日課書はブルゴーニュ宮廷の礼拝堂のために制作された写本であり、挿絵は、頁サイズ（296×213 mm）の半分を占める。フィリップは色鮮やかな天幕のなかで、紋章を飾った祈祷台に書物を載せて跪き、公国の守護聖人アンドレに対して画面を二

分する。フィリップを囲む天幕の上部には、聖アンドレの十字架と「ブルゴーニュ公国の火」のモチーフが示される。さらに、天幕の左側の布地を聖アンドレの立つ建造物にからめ掛けることで、聖アンドレとフィリップが空間を共有していることをさらに強調している。

二点目は、『天使祝詞論』(表⑨・図 12)に描かれた祈祷者フィリップである<sup>(36)</sup>。本作品は同書で唯一の挿絵であり、頁(383×266 mm)の半分を占める大きさで表わされる。画面右側では聖母マリアへの受胎告知が繰り広げられるが、画面左側に描かれた赤・青・緑からなる華やかな天幕や紋章で飾られた祈祷台が、跪拝するフィリップへの注目も促す。この祈祷台と天幕は、前出の『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』(図 11)と同種のもののようだが、本挿絵では、フィリップが跪く天幕とマリアのたたずむ建物の柱が紐によって結ばれることで、両者のいる空間の同一性が示されている。このように、祈祷者像においても、天幕・紋章などのモチーフや祈祷者が画面に占める位置の工夫により、フィリップの地位と権威が称揚される。

さらに、フィリップの祈祷者像は、同一写本にその姿を繰りかえし登場させる点も特徴的である<sup>(37)</sup>。管見のかぎり、ウィーンに所蔵される『フィリップ・ル・ボンの時祷書』(表①～表③、図 8)とブリュッセル所蔵の二冊本の『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』(表⑥～表⑧、図 11、図 14)では各々 3 回、ミュンヘン所蔵の『フィリップ・ル・ボンの祈祷書』(表⑬～表⑰)では 4 回ものフィリップの祈祷者像を認めることができる。とくにハーグ所蔵の『フィリップ・ル・ボンの時祷書』においては、フィリップが 8 回も登場する点が注目に値する(表⑩～⑰、図 13、図 15～図 19)。これらの 8 枚の挿絵において、顔の左側から 4 分の 3 観面で捉えられたフィリップ(ただし図 18 では右側面を捉えている)は、脱帽し、金羊毛騎士団の首飾りを身につけ剣を携え、書物を広げた祈祷台の前に跪くという定型表現をとっている。本書の挿絵はすべてグリザイユ技法で表わされているが、服の型から判断すると、フィリップに典型的な黒い衣服を着用しているように思われる。さらに、本書の他の箇所でも繰りかえされるフィリップの肖像やモットーによっても、公の存在とステイタスが強調されている。

このように写本内で祈祷者像や肖像を繰りかえし挿入する表現は、かつてベリー公ジャン(1340～1416 年)が注文した『ベリー公の小時祷書』にも認められるものである(図 5)。本時祷書に描かれた祈祷者ベリー公は、低い位置でキリストの彫像を崇敬しつつ、華やかな祈祷台や毛皮つきの衣服などにより自身への注目も促しているようであるが、時祷書内に何度も登場するベリー公に対しては、教えを守り、敬虔な信徒であることを示すという意味での自己称揚が見いだされることが指摘されている<sup>(38)</sup>。とくに信心深さを誇示していると捉えられるのは、同書が、王侯貴族がキリスト教徒として生活するにあたっての作法を指南する記述に紙面を割いているためである。このように、『ベリー公の小時祷書』からは、ブルゴーニュ公に先立つ王侯貴族が、敬虔さも示す自己称揚の手段として写本挿絵を利用していたことがうかがえる。

なお、ベリー公の祈祷者像群の服装に統一性は見られないが、常に黒い衣服をまとうフィリップには、より戦略的に自己称揚する態度が認められるように思われる。フィリップの黒の衣服は、毛皮で縁取られたダマスク織の布地があてるなど、装飾性の強さがうかがえるものである。

(8)

(表④・図9)。ここにはまず、前述したような流行の牽引者として、フィリップの富やステイタスを示す役割が付与されていると捉えられる。さらに、黒の衣服には、悲しみや喪の要素も含まれていた。というのも、フィリップがそもそも黒を着用するようになった契機は、二代目ブルゴーニュ公の父ジャン・サン・プール(「無畏公」、在位1404～1419年)が1419年に暗殺された事件にあり、彼はこれを機に、悲しみを一生忘れないようにと黒服を着用するようになったと伝えられる<sup>(39)</sup>。中世においては白や紫も喪の色として用いられていたが、中世末期になると、黒の持つ喪の意味も強まっていた<sup>(40)</sup>。それゆえ、フィリップの黒の衣服は、流行や富を示すばかりでなく、先代の公にして父であったジャンを悼み、ジャンから受け継いだブルゴーニュ公の権威を思い起こさせる役割も担っていたと考えられる。

以上に検討したように、フィリップの祈祷者像は、祈祷対象と同一空間に大きく描く構図、黒服に金羊毛をまとう服装、祈祷台につけられた紋章や天幕の飾り、そしてその姿を何度も登場させることなどによって称揚された。しかし、《聖アンドレと祈祷者フィリップ・ル・ボン》(図11)や《受胎告知と祈祷者フィリップ・ル・ボン》(図12)などの自己称揚の強い作例であっても、《ロランの聖母子》(図2)で表わされたような祈祷者と祈祷対象をほぼ対等に描かせる表現には至っていない点に注意しておきたい。それは、ハーグの時祷書の一頁(図13)と《ロランの聖母子》とを比較するとより明らかだろう。この2枚の作品は、祈祷者が聖母子と対峙し、幼児キリストから祝福を受ける構図やポルティコのある建物などに類似点も多いが、ハーグ作品においては、祈祷者の画面を占める割合や聖母と比した際の頭部の高さが抑えられている。それはフィリップの他の祈祷者像においても同様である。すなわち、フィリップが祈祷対象と空間を共有する際には、祈祷台に跪いたり、視線や高さを祈祷対象より低くしたり、あるいは画面の端で祈ったりする姿で表わされ、聖なる人物との適切な関係を保つための配慮がなされているように思われる。このような表現は、たんに以前の祈祷者像(図1、図5)の伝統に立ち戻るというよりも、前述のベリー公の『小時祷書』に見られた敬虔さの表現方法や、《ロランの聖母子》などで試みられた革新を踏まえたうえでの、祈祷者としてのあるべき姿を探究した自己称揚の一環であったのではないだろうか。

### (3) フィリップ・ル・ボン以外の注文による祈祷者像

フィリップ・ル・ボンの祈祷者像には定型表現が認められたが、他者の注文によりフィリップの祈祷者像が表わされる際には、紋章付きの華やかな武具を身につけたり(表22、表23・図20、表25)、黒あるいは深緑の布地に金糸の刺繍や毛皮の縁取りが目立つ衣服をまったり、王冠を身につけたりしている(表24・図21)。これらの作品においては、支配者としてのフィリップを称揚しつつも、仲介聖人をともなったり(表23・図20、表25)、画面の隅の方で祈祷させるなどの敬虔さを示す傾向が強くなる。

その傾向は、とくにヘントの壁画(表23・図20)に認められる。本壁画は、肉屋のギルドホール(礼拝堂)を飾るために1448年にヤコブ・デ・ケテルボにより注文された<sup>(41)</sup>。損傷が激し



いものの、当初の主題は、地面に横たわるキリストを聖母マリア、ヨセフ、3名の天使が囲む「降誕」であったことが判明している。そして降誕の下方では、祈祷者フィリップ・ル・ボンが紋章つきの武装姿で、妻イザベル、息子シャルル突進公らとともに表わされている。この描写を、祈祷者を同じ降誕場面へと参入させた《ブラーデリンの祭壇画》(図3)と比較すると、本壁画の祈祷者と聖なる人物との階層が明確に区別されていることがうかがえる。

同様に、公国の宰相ニコラ・ロランがロヒール・ファン・デル・ウェイデンに1445～1450年頃に注文した《ボヌ祭壇画》にもフィリップ・ル・ボンの姿が見いだされる。それは「最後の審判」を表わした多翼画の左から二番目のパネルにおいてであり、フィリップは、祈る使徒たちの後ろの列で王冠をかぶりダマスク織の衣服をまとい、手を合わせている(表24・図21)<sup>(42)</sup>。公は《ボヌの祭壇画》の設置場所となったニコラ・ロラン創設の施療院にかかる租税免除を認めたこともあり、同様に施療院開設の特別許可を出した教皇エウゲニウス四世とともに描かれている<sup>(43)</sup>。フィリップは、本祭壇画の主題である「最後の審判」のなかでは画面の隅で祈る群像のひとりにすぎないものの、フィリップの右側の人物に同定されるニコラ・ロランに至っては、描かれる場所・服装とも、さらに抑制的な姿で表わされる。これは、施療院設立に協力したブルゴーニュ公や教皇を称揚するための配慮であったと考えられる。注文主ロランとの対比でフィリップを称揚する表現は、ボヌの施療院の大広間に設置されたステンドグラス(表22)にも認めることができるものである。

ところで、これらの作品に見られる宰相ニコラ・ロランの祈祷者表現には、フィリップ・ル・ボンとの対比で抑制するだけでなく、フィリップのさまざまな祈祷者像表現を参照したうえでの図像の変容が見られるように思われる。そこで以下では、おもにロランの祈祷者像を例に、初期フランドル絵画の祈祷者像とフィリップ・ル・ボンの祈祷者像を比較・検討したい。

## 5. フィリップ・ル・ボンと初期フランドル絵画の祈祷者像

本稿の冒頭で述べたように、初期フランドル絵画においては祈祷者の姿を強調するような革新的な表現が流行した。また、フィリップ・ル・ボンの描写には祈祷者フィリップ自身を称揚する表現が認められるが、そこには、祈祷者が聖母子とほぼ同じ高さで画面を二分する《ロランの聖母子》(図2)のニコラ・ロランほどの大胆さは見られない。フィリップの祈祷者像が多く表わされたのは、《ロランの聖母子》が1430年代中頃に制作された後の1440～1450年代以降であるが、その描写は、ロランの注文作品をはじめ、以後の初期フランドル絵画の祈祷者表現にも変化を及ぼしたようである。

前述したように1445～1450年前後に制作されたと推定される《ボヌの祭壇画》において、ニコラ・ロランは、祭壇画内翼・外翼両方に祈祷者として登場する(図21、図22)<sup>(44)</sup>。ここでは、フィリップ・ル・ボンのうしろに控えめに描かれた内翼の祈祷者像はもちろん、聖なる人物と異なるパネルに描き分けることで次元の差を明示される外翼の祈祷者像もまた、《ロランの聖

(10)

母子》の祈祷者表現と比べるとかなり抑制されている。それは、フィリップの祈祷者像において探究された敬虔さを含む自己称揚の表現が踏まえられたためではないだろうか。ロランがフィリップの祈祷者像表現を考慮していた可能性は、《ボーンの祭壇画》におけるロランの衣服が、フィリップ・ル・ボンが身にまとっていたような黒服である点からも推察される。この黒服は、ブルゴーニュ宮廷の関係者が注文した《ブラーデリンの祭壇画》(図3)や《ド・クロワの二連画》(図4)、そして《磔刑の祭壇画》(ウィーン、美術史美術館)の祈祷者も身につけており、多くの宮廷人がフィリップの服装を参照したことがうかがえる。このように、《ロランの聖母子》と比べると抑制的な表現が増したように思われる《ボーンの祭壇画》の祈祷者ロランの変化には、フィリップ・ル・ボンの祈祷者像の影響があったことを指摘できる。

その後、ヤンやロヒールの次の世代を代表する画家ハンス・メモリンク(1440頃～1494年)の祈祷者像では、さらなる変化が生じた。メモリンクは、ヤンやロヒールの構図を踏襲しつつ改変を加えていった画家だが、祈祷者像においては、祈祷対象に配慮する表現を展開した。たとえば、メモリンク作品のなかでは祈祷者が強調される《聖母子と祈祷者クリスティアーン・ド・ホント》(図23)ですら、頭の位置をより低くして聖なる人物との階層差をもうけている<sup>(45)</sup>。さらに、聖なる人物と祈祷者を異なるパネルに描いた作品や、とりなしの聖人を伴う祈祷者像も増加した(図24)。その変容の背景については、注文主層の変化も含めて改めて考察すべき問題であるが、少なくとも、フィリップ・ル・ボンが探究した祈祷者としての望ましい姿は、「モデル」として初期フランドル絵画の注文主や画家たちに共有されたことがうかがえる。そしてその「モデル」は、メモリンクの世代に継承された時点で、祈祷対象との均衡を重視する側面に比重が置かれるようになっていったのではないだろうか。

以上に検討したように、フィリップ・ル・ボンの祈祷者像には、祈祷対象と同一空間に同じ大きさで描く構図、金羊毛の首飾りを身につける黒色の衣服、祈祷台につけられた紋章や天幕の飾り、そして祈祷者を繰りかえし表わす表現などに、支配者ブルゴーニュ公の権威を示す自己称揚の要素を認めることができた。同時に、祈祷対象へ配慮する表現も見られたが、これも自己称揚の一環として捉えられる。このように信心と自己称揚を共存させるフィリップの祈祷者像は、「モデル」として、初期フランドル絵画の祈祷者像表現に影響を与えた指標的な作例と位置づけられるだろう。

#### 註

- (1) 肖像画については以下を参照。John Pope-Hennessy, *The Portrait in the Renaissance*, New York, 1966, in part. pp.257-258. 祈祷者像の定義・分類については、以下の拙稿を参照。今井澄子「聖母子への祈り-15世紀前半のフランドル絵画における祈祷者表現の研究-」博士論文、慶應義塾大学、2009年。なお、寄進者像(donor portrait)は、寄進者と寄進対象との結びつきを示す。崇敬対象に向かって跪き、両手を合わせて祈るという形式的な特徴は祈祷者像とほとんど差異がないため、両者の区別なく「寄進者」とされることが多いが、祈祷者を表わした絵画が聖堂への寄進を意図している

とは限らないこと、および、寄進者と画中で祈る人物が一致しないことがある点から、本稿では「祈祷者」とする。

- (2) 《ロランの聖母子》については以下を参照。今井、前掲書、第4章。
- (3) このような祈祷者像の展開については以下を参照。今井、前掲書；木川弘美「寄進者の肖像－間近にみる聖なる世界」蜷川順子責任編集『初期ネーデルラント美術にみる〈個と宇宙〉Ⅰ 人のイメージ－共存のシミュラクル』ありな書房、2011年、99-125、207-213頁。
- (4) 二連画と祈祷者像については、以下を参照。John O. Hand et al., *Prayers and Portraits: Unfolding the Netherlandish Diptych*, Washington et al., 2006.
- (5) 15世紀フランドルにおける個人祈祷の流行と絵画表現については、以下を参照。今井澄子「15世紀フランドル絵画における祈祷者とヴィジョン－中世末期のキリスト教社会におけるイメージの役割をめぐる一考察－」『西洋中世研究』No.1、2009年、123-140頁。以下の文献も参照のこと。Sixten Ringbom, "Devotional Images and Imaginative Devotions," *Gazette des Beaux-Arts*, 6<sup>e</sup> pér., 73, 1969, pp.159-170.
- (6) フィリップ・ル・ボンの北方への領土拡張については、以下を参照。Richard Vaughan, *Philip the Good: The Apogee of Burgundy*, London, 1970, pp.29-53; Bertrand Schnerb, *L'État bourguignon 1363-1477*, Paris, 2005, pp.201-214. また、以下の論考では、フィリップ・ル・ボンの滞在地の統計から都市ブリュッセルの重要性を指摘している。Joseph Kreps, "Bruxelles, résidence de Philippe le Bon," dans *Bruxelles au XV<sup>me</sup> siècle*, Bruxelles, 1953, pp.155-163.
- (7) 今井澄子「ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンのコレクション－アレクサンダー大王のタペストリーにみる政治的役割－」遠山公一・金山弘昌編『美術コレクションを読む』慶應義塾大学出版会、2012年、191-211頁。ブルゴーニュ宮廷と美術については以下に詳しい。Walter Prevenier & Wim Blockmans, *The Burgundian Netherlands*, Cambridge, 1986, in part. pp.282-361.
- (8) "... servoit Dieu et le craignoit; fort dévot à Nostre Dame; ... donnoit grandes aumosnes, et en secret." Georges Chastellain, M. Kervyn de Lettenhove, éd., *Œuvres*, VII, Bruxelles, 1863-1866, p.222.
- (9) Bertrand Schnerb, "La piété et les dévotions de Philippe le Bon, duc de Bourgogne (1419-1467)," dans *Comptes-rendus des séances de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 149<sup>e</sup> année, N.4, 2005, pp.1319-1344, in part. p.1325.
- (10) Schnerb, *op. cit.*, "La piété et. . .," p.1331.
- (11) "... Alloit tard à messe et hors de heure . . . il excéda toute observance chrestienne." Chastellain, *op. cit.*, VII, p.225.
- (12) "«Si Dieu m'a donné victoire, il la me gardera; et en peut tant faire à ma requeste, s'il luy plaist de m'estre misericors, qu'il fera à l'aide de toute ma chevalerie . . . à l'aide de Dieu ilz soubtiendront bien jusques à ma venue.» Ainsi parla le bon duc, et paracheva ses oraisons . . ." Henri Beaune & J. d'Arbaumont, *Mémoires d'Olivier de la Marche: maitre d'hotel et capitaine des gardes de Charles le Téméraire*, II, Paris, 1884, p.40. 訳は以下を参照。ジョゼフ・カルメット、田辺保訳『ブルゴーニュ公国の大公たち』国書刊行会、2000年、468-469頁。
- (13) Vaughan, *op. cit.*, pp.205-238; Prevenier & Blockmans, *op. cit.*, pp.232-234.
- (14) Vaughan, *op. cit.*, p.216.
- (15) Murielle Gaudé-Ferragu, "Les dévotions princières à la fin du Moyen Âge: les testaments des ducs de Bourgogne et de leur famille (1386-1477)," *Revue du Nord*, 86, 2004, pp.7-23, in part. p.22; Schnerb, *op. cit.*, "La piété et. . .," pp.1337-1340.
- (16) Gaudé-Ferragu, *op. cit.*, pp.18-19.
- (17) Prevenier & Blockmans, *op. cit.*, p.232.

- (18) Schnerb, *op. cit.*, “La piété et. . .,” pp.1321–1322.
- (19) 今井、前掲書 (2012 年)。
- (20) “. . . Son semblant seulement le jugeoit empereur ; et valoit de porter couronne, seulement sur les grâces de nature . . .” Chastellain, *op. cit.*, VII, p.220 ; カルメット、前掲書、197–198 頁。
- (21) “. . . El señor Duque es muy nobilissima persona é de grant virtud, muy gentil gesto é muy gentil cuerpo, alto aunque delgado, allende de manera galan quanto puede ser . . .” Pero Tafur, *Andanças é viajes de Pero Tafur por diversas partes del mundo avidos : 1435–1439*, Madrid, 1874, p.248 ; カルメット、前掲書、198 頁。
- (22) “. . . de stature il estoit moyennement haut homme, corporellement, à la mesure de sa hauteur, . . . ; et avoit plus en os qu’en charnure, veines grosses et pleines de sang . . . nez non aquilin, mais long ; plein front et ample, non calve ; chevelure entre blond et noir, . . . ; portoit bouche en juste compas ; lèvres grosses et colorées ; les yeux vairs, de fière inspection telle fois, mais coutumièrement amiables . . .” Chastellain, *op. cit.*, VII, p.219.
- (23) シャンモル修道院と肖像彫刻については以下を参照。Élisabeth Antoine et al., *Art from the Court of Burgundy: The Patronage of Philip the Bold and John the Fearless*, Dijon, 2004, pp.175–178 ; Schnerb, *op. cit.*, *L’État. . .*, pp.125–133.
- (24) フィリップ・ル・ボンの肖像については以下を参照。Jeffrey Chipps Smith, *The Artistic Patronage of Philip the Good, Duke of Burgundy (1419–1467)*, Ph. D. diss., Colombia University, 1979, pp.279–331.
- (25) 15 世紀の黒色の流行については、以下を参照。徳井淑子「フィリップ善良公の“涙の文様の黒い帽子”－中世末期のモード・文学・感性」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第 50 巻、1997 年、331–343 頁、とくに 333–335 頁；徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』講談社選書メチエ、2006 年、182–200 頁。15 世紀には、黒色は貴族層から市民層まで、男女を問わず流行した。
- (26) ブルゴーニュ公への献呈図については以下を参照。Pascal Schandel, “Les images de dédicace à la cour des ducs de Bourgogne : Ressources et enjeux d’un genre,” dans Bernard Bousmanne & Thierry Delcourt, eds., *Miniatures flamandes, 1404–1482*, Paris/ Bruxelles, 2011, pp.66–80.
- (27) Smith, *op. cit.*, pp.299–309.
- (28) 本壁画の制作年は、チュールロワの修道院への寄進記録や、17 世紀初頭に制作された模写に見られる紋章の型から判断されている。Smith, *op. cit.*, pp.299–301.
- (29) Smith, *op. cit.*, pp.306–309.
- (30) “ung aultre ou est Notre-Dame et saint Bernard d’un costé, et de l’autre costé la portraicture de feu monseigneur le duc Philippe . . .” J. B. C. Boudrot, “Inventaire de l’Hôtel-Dieu de Beaune (1501),” *Mémoires de la Société d’Histoire, d’Archéologie et de Littérature de l’Arrondissement de Beaune*, 1874, p.123.
- (31) 表に挙げた作例の基本情報については、以下の各所蔵先のカatalogなどを参照。Victor Leroquais, *Le Bréviaire de Philippe le Bon : bréviaire parisien du XV<sup>e</sup> siècle*, Bruxelles, 1929 ; Maurits Smeyers, *Flemish Miniature from the 8th to the Mid-Fifteenth Century*, Turnhout, 1999, pp. 296–299 ; Bernard Bousmanne et al., *La librairie des ducs de Bourgogne : Manuscrits conservés à la Bibliothèque royale de Belgique*, I, Turnhout, 2000 ; Anne S. Korteweg, “The Book of Hours of Philip the Good, Duke of Burgundy, in the Hague and its later Adaptation,” in Bert Cardon et al., eds., “Als ich can” : *Liber amicorum in memory of Professor Dr. Maurits Smeyers (Corpus of Illuminated Manuscripts 11)*, Paris/ Leuven, 2002, pp.757–771.
- (32) フィリップ・ル・ボンの蔵書については以下を参照。Georges Doutrepont, *La Littérature française à la cour des ducs de Bourgogne : Philippe le Hardi – Jean sans Peur, Philippe le Bon – Charles le*

- Téméraire*, Genève, 1970 [1909] ; Georges Doutrepoint, *Inventaire de la "librairie" de Philippe le Bon (1420)*, Genève, 1977.
- (33) 1440 年頃には祈祷書に挿絵をする画家が少なくとも 6 名は雇われていた。1451 年には、ウィレム・ヴレラン、ジャン・ル・タヴェルニエ、ドリユー・ジャンなど、およそ 14 名の写本挿絵家が雇われた。Smeyers, *op. cit.*, p.297.
- (34) この作品に関しては以下を参照。Dagmar Eichberger, "Devotional Objects in Book Format : Diptychs in the Collection of Margaret of Austria and Her Family," in Margaret M. Manion & Bernard J. Muir, eds., *The Art of the Book : Its Place in Medieval Worship*, Exeter, 1998, pp.291-323 ; Hand et al., *op. cit.*, p.5.
- (35) 『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』については以下を参照。Leroquais, *Ibid* ; Bernard Bousmanne, *Item a Guillaume Wyelant aussi enlumineur*, Bruxelles, 1997, pp.172-175 ; Bousmanne et al., 2000, *op. cit.*, pp.155-159.
- (36) 『天使祝詞論』については以下を参照。Bousmanne et al., *op. cit.*, 2000, pp.112-118 ; Bousmanne & Delcourt, *op. cit.*, pp.254-255.
- (37) ハーグの時祷書には、本来は 230 点のグリーザイユと 2 点の彩色挿絵がおさめられていたようだが、現存する挿絵は 162 枚程度である。Korteweg, *op. cit.*, pp.757-771. ミュンヘンの祈祷書については以下を参照。Leroquais, *op. cit.*, p.162, PL.19 ; Bousmanne, *op. cit.*, 1997, pp.276-277.
- (38) Carol J. Purtle, "The Iconography of Prayer, Jean de Berry, and the Origin of the Annunciation in a Church," *Simiolus*, 20, 1990-91, pp.227-239, in part. pp.230-231 ; Roger S. Wieck, "The Savoy Hours and its Impact on Jean, Duc de Berry," *Yale University Library Gazette*, 66, 1991, pp.159-180, in part. 166-172 ; Rob Dückers, Pieter Roelofs et al., *The Limbourg Brothers : Nijmegen Masters at the French Court, 1400-1416*, Nijmegen, 2005.
- (39) "Et le duc bourgongnon . . . toutesvoies n'estoit vestu encores que de noir, ensemble toute la greigneur part de ses gens." Chastellain, *op. cit.*, I, pp.187-188 ; 徳井、前掲書 (1997 年)、333-335 頁 ; 徳井、前掲書 (2006 年)、192-193 頁。
- (40) 徳井、前掲書 (2006 年)、198 頁。
- (41) Carina Fryklund, *Flemish Wall Painting (Late Gothic Wall Painting in the Southern Netherlands)*, Turnhout, 2011, pp.228-241. 本壁画は、1855 年まで漆喰で塗り込められていた。
- (42) 描かれている人物は向かって左から、ときの教皇エウゲニウス四世、ニコラ・ロランの息子でオータン大司教となったジャン・ロラン、フィリップ・ル・ボン、ニコラ・ロランと推定される。Nicole Veronée-Verhaegen, *L'Hôtel-Dieu de Beaune, Les Primitifs flamands : I. Corpus de la peinture des anciens Pays-Bas méridionaux au quinzième siècle*, 13, Bruxelles, 1973, pp.38-39.
- (43) Herta-Florence Pridat, *Nicolas Rolin : Chancelier de Bourgogne*, Dijon, 1996, p.149.
- (44) 《ボースの祭壇画》の制作年については以下を参照。Veronée-Verhaegen, *Ibid* ; Dirk de Vos, *Rogier van der Weyden : l'œuvre complet*, Paris, 1999.
- (45) 《聖母子と祈祷者クリスティアーン・ド・ホント》の帰属や祈祷者の同定については以下を参照。Dirk de Vos, *Hans Memling : l'œuvre complet*, Anvers, 1994, pp.212, 215-216 ; Hand et al., *op. cit.*, p.145.

【附記】本研究は、平成 25 年度科学研究費（研究活動スタート支援、課題番号：24820067）による研究成果の一部である。

表：フィリップ・ル・ボンの祈祷者像のリスト

本表は、フィリップ・ル・ボンの注文作品（①～㉑）とフィリップ以外の注文による作品（㉒～㉖）に分け、制作年順にリスト化した。また、紙面の都合上、同一写本の書名は既出の表番号を示すにとどめた。表⑩～表⑰のサイズは挿絵部分、他は写本一頁の大きさである。

	図番号	作品名	型式・表現の特徴
①	図 8	《祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1445-50 年頃、185×127 mm、ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod.1800, fol.1 v-2 r.	時祷書上部に二連画（1430 年代）を付ける（表②・③も同じ）。
②		《聖グレゴリウスのミサと祈祷者フィリップ・ル・ボン》（書名・所蔵先は表①参照）、Cod.1800, fol.4 r.	
③		《聖母像と祈祷者フィリップ・ル・ボン》（書名・所蔵先は表①参照）、Cod.1800, fol.13 v.	
④	図 9	《聖グレゴリウスのミサと祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-55 年、253×178 mm、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、Ms.3-1954, fol.253 v.	フィリップ・ル・アルデイ注文の時祷書に追加された挿絵である。
⑤	図 10	《祈祷者フィリップ・ル・ボン》『主の祈りについての論』1457 年以降、395×290 mm、ブリュッセル、王立図書館、ms.9092, fol.9 r.	教会でのミサに参列している場面。聖職者や従者が同席する。
⑥	図 14	ウィレム・ヴレラン（または工房）《祈るフィリップ・ル・ボン夫妻》『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』296×213 mm、ブリュッセル、王立図書館、Ms.9026, fol.258 r.	
⑦		《十字架と祈るフィリップ・ル・ボン夫妻》（作者・書名・所蔵先は表⑥参照）、Ms.9026, fol.425 r.	構図は表⑥にきわめて近い。
⑧	図 11	《聖アンドレと祈祷者フィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑥参照）、Ms.9511, fol.398 r.	聖アンドレと画面を二分する。
⑨	図 12	《受胎告知と祈祷者フィリップ・ル・ボン》『天使祝詞論』1461 年、383×266 mm、ブリュッセル、王立図書館、ms.9270, fol.2 v.	受胎告知の場面と画面をほぼ二分する。
⑩	図 15	ジャン・ル・タヴェルニエと追隨者《磔刑と祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-1460 年代、75×65 mm、ハーグ、王立図書館、Ms 76, F 2, fol.20 r.	グリザイユ技法で表わされる（表⑪～表⑰も同じ）。
⑪		《ミサに出席するフィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、85×70 mm、Ms 76, F 2, fol.41 v.	聖職者の後方で祈る。従者が立ち会っている。
⑫	図 16	《聖体を受けるフィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、85×70 mm、Ms 76, F 2, fol.43 v.	
⑬	図 17	《祈祷者フィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、85×65 mm、Ms 76, F 2, fol.44 v.	単独で祭壇に向って祈る。
⑭		《聖母子と祈祷者フィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、85×65 mm、Ms 76, F 2, fol.45 v.	天幕のなかで聖母子へ跪拝する。
⑮	図 18	《聖母子と祈祷者フィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、85×70 mm、Ms 76, F 2, fol.48 v.	
⑯	図 19	《キリスト、受難具と祈祷者フィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、80×65 mm、Ms 76, F 2, fol.282 r.	
⑰	図 13	《聖母子と祈祷者フィリップ・ル・ボン》（作者・書名・所蔵先は表⑩参照）、80×110 mm、Ms 76, F 2, fol.299 r.	
⑱		《磔刑と祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの祈祷書』ミュンヘン、バイエルン州立図書館、cod. gall., 40, fol.72 v.	磔刑の下で跪き祈る。ヴレランとの関係が指摘される。
⑲		《聖体奉挙と祈祷者フィリップ・ル・ボン》（書名・所蔵先は表⑱参照）、cod. gall., 40, fol.133 v.	
㉑		《聖体を受けるフィリップ・ル・ボン》（書名・所蔵先は表⑱参照）、cod. gall., 40, fol.141 r.	
㉒		《祈祷者フィリップ・ル・ボン》（書名・所蔵先は表⑱参照）、cod. gall., 40, fol.144 r.	
㉓		《磔刑と祈るフィリップ・ル・ボン夫妻》ステンドグラス、15 世紀、ボース、施療院	左に武装したフィリップ、右に妻イザベルが祈る。息子と仲介聖人を伴う。
㉔	図 20	《降誕と祈祷者フィリップ・ル・ボン》1448 年、3.58 m×4.36 m、ヘント、肉屋のギルドホール	フィリップは武装姿で表わされる。
㉕	図 21	ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ボースの祭壇画》（部分）1450 年前後、ボース、施療院	「最後の審判」において、使徒たちの後方で王冠を戴き祈る。
㉖		《ビエタと祈るフィリップ・ル・ボン夫妻》1466 年以降、青銅板、パーゼル、歴史美術館、inv.1870.673.	妻イザベルがパーゼルの修道院に寄贈した作品。
㉗		《祈祷者フィリップ・ル・ボン》ステンドグラス（断片）、15 世紀、ディジョン美術館	金羊毛とフィリップのモットーが表わされる。



図1 ボヘミアの画家《グラーツの聖母子》1343-44年、186×95 cm、ベルリン、国立絵画館



図2 ヤン・ファン・エイク《ロランの聖母子》1430年代中頃、66×62 cm、パリ、ルーヴル美術館



図3 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ブラーデリンの祭壇画》(中央パネル) 15世紀半ば、ベルリン、国立絵画館



図4 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ド・クロワの二連画》49×31 cm、サン・マリノ、ハンティントン図書館 (左翼) / 49×30 cm、アントウェルペン、王立美術館 (右翼)



図5 偽ジャックマール・ド・エダン《キリストの像に跪くジャン・ド・ベリー》『ベリー公の小時  
祷書』1385-90年頃、パリ、国立図書館、Ms. lat.18014, fol.106 r.



図6 ロヒール・ファン・デル・ウェ  
イデン (コピー)《フィリップ・  
ル・ボンの肖像》1475年頃、  
32.5×22.4 cm、ブルッヘ、市立  
美術館



図7 《フィリップ・ル・ボンへの献呈》『ジラール・ド・  
ルシヨンの物語』1448年、ウィーン、国立図書館、  
Cod.2549, fol.6 r.





図8 《祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1445-50年頃、ウィーン、オーストリア国立図書館、Cod.1800, fol.1 v-2 r.



図9 《聖グレゴリウスのミサと祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-55年、ケンブリッジ、フィッツウィリアム美術館、Ms.3-1954, fol.253 v.



図10 《祈祷者フィリップ・ル・ボン》『主の祈りについての論』1457年以降、ブリュッセル、王立図書館、ms.9092, fol.9 r.



図11 《聖アンドレと祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』ブリュッセル、王立図書館、Ms.9511, fol.398 r.



図 12 《受胎告知と祈禱者フィリップ・ル・ボン》『天使祝詞論』1461 年、ブリュッセル、王立図書館、ms. 9270, fol.2 v.



図 13 《聖母子と祈禱者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-60 年代、ハーグ、王立図書館、Ms 76, F 2, fol.299 r.



図 14 《祈るフィリップ・ル・ボン夫妻》『フィリップ・ル・ボンの聖務日課書』ブリュッセル、王立図書館、Ms.9026, fol.258 r.



図 15 《磔刑と祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-60年代、ハーグ、王立図書館、Ms 76, F 2, fol.20 r.



図 16 《聖体を受けるフィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-60年代、ハーグ、王立図書館、Ms 76, F 2, fol.43 v.



図 17 《祈祷者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』1450-60年代、ハーグ、王立図書館、Ms 76, F 2, fol.44 v.





図 18 《聖母子と祈禱者フィリップ・ル・ボン》  
『フィリップ・ル・ボンの時祷書』 1450  
-60 年代、ハーグ、王立図書館、Ms 76,  
F 2, fol.48 v.



図 19 《キリスト、受難具と祈禱者フィリップ・ル・ボン》『フィリップ・ル・ボンの時祷書』 1450-60 年代、ハーグ、王立図書館、Ms 76, F 2, fol.282 r.

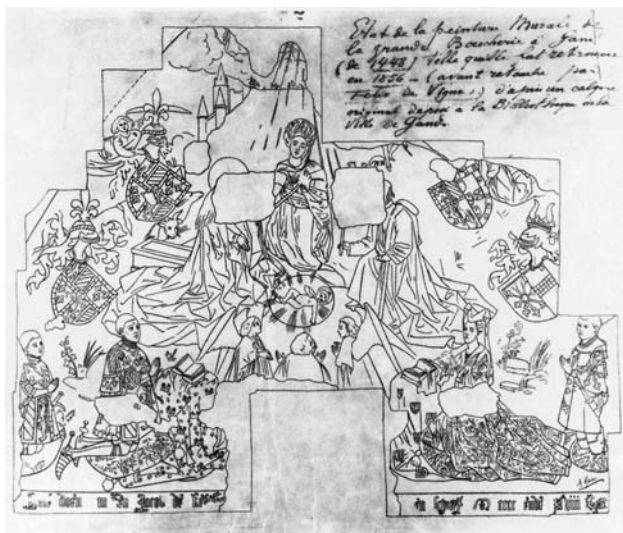


図 20 《降誕》ヘント、肉屋のギルドホルの礼拝堂、1448 年  
(A. Heins による模写、C. Fryklund, *Flemish Wall Painting*, Turnhout, 2011, p.229.)



図 21 ロヒール・ファン・デル・ウエイデン《ボースの祭壇画》  
(部分) 1450 年前後、ボース、  
施療院



図 22 ロヒール・ファン・デル・ウェイデン 《ボースの祭壇画》外翼、1450 年前後、ボース、施療院



図 23 ハンス・メムリンク（コピー）《聖母子と祈祷者 クリスティアーン・ド・ホント》1499-1510 年、68.5×47 cm、パリ、プチ・パレ



図 24 ハンス・メムリンク《ジャン・ド・スリエの二連画》1475 年頃、各翼 25×15 cm、パリ、ルーヴル美術館